HITOKOMART No.5

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

タイタニックは船の能力の過信とわずかな油断から歴史的な大惨事に繋がった。タイタニック映画には、幾つもの悲しい物語が描かれてきたが、あらためて言うまでもなくそこには乗船していた者全員の物語がある。沈み行く船とともに海に沈んだ人たちにはそれを伝える事も出来なかった。

『お・も・て・な・し』や『復興』を旗印にスタートした東京五輪もコロナのために沈没寸前に見える。タイタニック号の最期には多くの人たちが沈み行く船に残り、船と運命を共にしたのだが…東京都にもお国にもその覚悟はあるのだろうか。

私には、船が沈んでも自分だけ助かろうと目論む連中が沈没直前まで手招きをしているように見える。

船上の招き猫

A-2　変形

A-1

すくう！

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の中にサソリの灯の話がある。小さな虫を食べて生きてきたサソリがイタチに追われ、井戸に落ちてしまう話だ。井戸の中で溺れながら、こんな事ならイタチに食べられた方が良かったのにとサソリは悔やむのである。そしてサソリは神に願い、死んだ後、暗い宇宙を照らす赤い光となって輝き続ける。生あるものに『死』は必ず訪れる。天寿を全うする幸せな一生もあるが、与えられた寿命とは関係なく、死が突然訪れることも多い。1コマ漫画の定番に『ビル火災マンガ』がある。ビルの窓から助けを求める避難者と地上で大きく布を広げて飛び降りる者を受け止めようとする消防隊の図である。飛び降りるのが何者か、受け手はどんな人たちか、受ける道具は何なのか…いずれにしても生きるか死ぬかの絶対絶命的な状況であることに変わりはなく、この緊張感の中に漫画家はいろんな新しい仕掛けを組み込んで救って見せる。昔、桂枝雀さんが語っていた『緊張と緩和』の法則がここにもある。

王の間

A-1 変形

お辞儀

躙口
（にじりぐち）

生まれて初めての海外旅行は45歳の時、エジプトだった。仕事でアブシンベル神殿を舞台にしたイラストを描く事になってその資料を眺めているうちに無性にピラミッドの中を見てみたいと思ったのだ。漫画家仲間を誘って1週間ほどのエジプトツアーに参加した。

そして入ったピラミッド。王の間に続く大回廊の巨大さには圧倒されたが、王の間は予想に反してガランとした狭い空間に飾りの無い石棺が、ポツンと置かれているだけのものだった。見上げるような大回廊の先にある小部屋には背を小さくかがめないと入る事が出来なかったので、まるで茶室の躙り口のようだと思ったものだ。今はそこが王のミイラが納められた場所ではなかったという説に変わっているようだが当時はいかなる者も頭を下げて入るというのも同じだなと勝手に納得していた。

A-2 変形

A-1

「お〜い、ハズキルーペ！」

眼鏡型拡大鏡

眼鏡をお尻の下に敷いても大丈夫！と叫ぶコマーシャルで大ブレークしたハズキルーペ。最近は全くテレビで見かけないがこれは最初からのメーカーのプラン通りだったらしい。期間を決めて集中的にCM展開。いささか下品な表現も渡辺謙らの好感度で何とか救われてよく売れた。眼鏡の上からかける事にストレスを感じて最近は使うことは減ったが、確かに目の衰えた中高年には便利な商品である。残念なのは価格ほどではない安っぽさとデザインだろう。世の一流眼鏡ブランドがこの商品を手掛けてくれないかナアと真剣に思っているのである。